

「こけあつたさ。」

と答へる。しかし、おぢいさんには見えないので、また、

「どけあるから。」

「ここたい、ここたさ。」

その聲のする方に、おぢいさんが行つてみると、馬の足跡の中に、タニシがはいつてゐた。

「タニシどんだつたから。」

とおぢいさんが、びつくりして、またがつかりしてたづねると、タニシは一生懸命に、

「ぢいさん、どうぞもろちはいりよ。わたしが、ぢいさんとはあさんは養つていくけん、どうぞもろちはいりよ。」

とたのむので、おぢいさんは感心してタニシをもらつて歸つた。そして家につくと、大きな聲で、

「ばばさん、ばばさん、もろちきたばな、見てみなはり。」

さう云つて、たもとの中からとり出して見せた。おばあさんはそれを見ると、

「そらタニシどんぢやなかかな、タニシどんもろちきて何んきちんなるかな。」

といつて怒つた。おぢいさんは、

「そしたつちやぬし、ぢいさんとはばばさんは養うちいといふけんもろちきたた

さ。」

といつた。タニシも一生懸命に聲を絞つて、

「ばばさん、もろちはいりよ、わたしが何でんしてがまだしますけん、どうぞもろちはいりよ。」

とたのんだ。そこで、おばあさんも仕方なしにタニシを家においた。

「タニシどん、明日からタキモンとりの行かなんばい。」

おばあさんは、すぐもう仕事をいひつけた。

「はらはら。」

とタニシは素直に答へた。翌日になると、おぢいさんはタニシを馬の鞍の間にのせて、山に連れていつた。

ハイハイハイハイケドケドケドケドハイハイハイ

とおぢいさんが馬の調子をとつてやると、タニシは、すぐおぼへて自分一人でハイハイ………ケドケドといふのであつた（ケドケドといふのは石わら道をゆく時の調子ださうである）。

一日の仕事のことをおぼへてしまつたのもうその翌日からはタニシは一人で馬にのつて山に行つた。

ハイハイハイハイケドケドケドケドハイハイハイ

道行く人は小さいタニシの姿は見えぬので、誰も彼も不思議さうに、馬が獨り言いつてゐると思つて驚いてふりかへつた。

おぢいさんは今度はタニシを、やはり馬にのせて、町に薪を賣りに連れて行つた。

ピャラピャラピャラピャラケドケドケドケドハイハイハイハイ………

さうおぢいさんがいふと、タニシもすぐおぼえて同じやうに調子をとつた。ピャラといふのは薪のことである。

おぢいさんは薪問屋に行つて、

「息子ばもろたけんこれからたのむばな。」
といつた。

「ほう、そらよかつた、どれどぎやん息子どんかな。」

そこでおぢいさんはタニシを鞍の中からもつてきて見せた。

「そらタニシどんたい。」

と薪問屋の親父が呆れて云つた。

「こりが息子たい。」

とおぢいさんは、まじめな顔でタニシを息子にするまでの話から、タニシがよく仕事をしてくれるので樂になつたことなどを話した。薪問屋の親父も次第に感心し

た。

翌日からタニシは薪賣りにも町に一人で馬にのつて出てきた。山に行つては薪を切り出し、町に出てはそれを賣つた。

薪問屋には三人の娘がゐた。問屋の親父はタニシが無類の働き手であるのを見込んで、或る日、タニシに向つて、

「うちの娘をもらつてくれんかな。」

といつた。タニシはちどろいて、

「タニシのよめになんの來なはらうかい。」

といつた。しかし問屋の親父は、どうしてももらつてくれ、とくりかへした。

「そぎやんしたわけなら、歸つて、ぢいさんとばあさんに話して見るけん。」

といつてタニシは家に歸つてからそれを老人夫婦に相談した。老人夫婦は、

「そぎやん、しやりむりもろちくれといはすなら、もろたつちやよかたい。」

といひ、ぢいさんがもらひに行つた。そこで薪問屋の親父は一番上の娘に、

「どうだ、タニシどんの嫁にいかんか。」

とたづねた。すると一番上の娘は即座に、

「タニシの嫁なんか誰がいくもんか、黒腐れしてんタニシにや行かん。」

といつて、ことはつた。親父はそこで二番目の娘をよんできいた。すると二番目の

娘も、

「タニシの嫁なんか大切な話、赤腐れしてんタニシのとけにや行かん。」

といつてことはつた。そこで今度は三番目の娘をよんできいた。すると三番目の娘

は、

「わたしはお父さんのいふところならどこにでもいきます。」

と答へた。そこでタニシと三番目の娘とは夫婦になつた。二人は一生懸命に働い

た。

その中に日が経つて、お盆の日がきた。

二人で道を行きつつタニシは嫁御にむかつて、

「あれをお前の袖から出して、ウツビシヤでくれ。」

といった。嫁はおどろいて、

「そんなことするのはいやです。」

とことはつた。

タニシはそれをきくと腹を立てて、

「ウツビシヤがんなら歸れ。」

といった。そこで嫁は仕方なしに、タニシを袖から出して石でウツビシヤいだ。するとその中から立派な男が出てきた。そしておどろく嫁に笑ひかけて、

「おれはタニシのツ（殻）の中に三年の間入つとつた。随分きつかつた。さあ、これからぢいさんばあさんにうんと孝行するぞ。」

と云つた。そこで二人は喜び勇んで家に歸つた。おぢいさんとおばあさんは、嫁が立派な男と歸つてきたのを見て、

「タニシどんなどうしたつた。」

ときいた。嫁は、

「タニシさんは、この人です。」

と笑つて云つた。すると老夫婦は、

「とぼけたこつばいふな、うぬはタニシどんに愛憎づかして別に男バつくつたな、そしてタニシどんばうすてはつたろ。」

とどなつた。若い男は、にこにこして、

「ぢいさん、ばあさん、わたしですたい、わたしがタニシでしたたい。たまがられるのも道理、實はタニシのツ（殻）の中にわたしは三年間も宿つとりました。苦勞しましたばい。これからお二人のためうんと孝行しますばい。」といった、といふ。

第九十二話

高さくらへに降参した山の話

熊本の町の中にはさんで西の方に金峯山といふ山が聳え、東の方に飯田山といふ

山が見えてゐる。金峯山は別名西山といひ、飯田山は、もと東山といつてゐた。この東西の山にはそれぞれ山の神様が住んでゐられて、おたがひに昔は、にらみあひをつづけあ互に相手の山を低いと見下げてゐられた。西山の神様はおとなしいので口でこそそれと言はれないが東山より高いと自信があつたし、東山の神様も高さにかけては自信があつて、少し元氣でもあつたのでそれこそ口に出して、「俺の方が西山よりかづつと高いぞ。」といばつてゐられた。他の神様が東山に遊びにでもこられると、東山は西山を指しながら、肩をそびやかして、

「どうだ、あの西山より俺の方がづつと高いだらう。」

とさかんに繰りかへした。しかし聞かれた神様達から見れば、どちらが高いかわからぬので、どちらともいひかねて、ふんふんとただ聞き流してゐるばかりであつた。

しかし東山の神様が誰彼となくそのことを威張つてみせるので、神様達も少しうるさがるやうになり、いつしか神様達の間で噂話になつて、

「あの東山の威張り方は、こまつたものだ。」

といつてゐた。それが大神様のお耳に入つた。大神様は笑つて、

「それは、おもしろい話だ。東山がそんなに威張つてゐるならそれが本當かどうかはかつてみたらどうだ。」

といはれた。八百萬の神々は、これを聞くと、

「さあ、いよいよおもしろくなつたぞ。あの威張り屋の東山が勝つか、おとなしい西山が勝つか。」

とよるとさはるとその話でにぎはつた。しかし山の高さをはかる方法がなかなかおもひつかない。どうしたらいいかと皆々困つてゐると、この話を末座に控へて先程より聞いてゐた籬荒神様が口をはじめて開かれた。

「皆の神様、かうしてはどうでせうか。私の籬に數百年も経つた一本の竹があります。皆の神様も御承知のやうに天の川のお星様でも打ち落す位の長い竹です。あれは私の何より自慢の竹ですが、あの竹を切つて、樋をつくつて東山と西山の頂にそ

れを架け渡し水を流すと低い方に水が流れることになり、水が流れて行つた方が低いときめてはどうでせう。又竹の餘りで竹桶や竹田子たけたごを作り大勢の神様で山の麓の堤より水を汲みあげ、樋に流すやうにしたらよくはないかと思ひますがどうでせうか。」

それを聞いた皆の神々は手をたたいて、

「これはよい考へだ、それでは早速さうしよう。」
と話はたちまち一決した。

そこで早速藪荒神様が中心となつてその大竹を切り倒し、樋をつくるやら、竹桶や竹田子をつくるやら、それはそれは大變な騒ぎであつた。

三日三晩もかかつてやつと出来上つたので、いよいよ竹の大桶に樋をつけて水を流すことになつた。竹桶といつてもその大きさは想像以上のものであつた。

水は東山と西山とより同時に流すことになつた。皆の神様は兩肌脱いで大鬘をめぐめいめいに向ふ鉢巻にし、麓の大堤の水を、ヨイシヨイシヨと掛聲勇ましく、頂上

まで運んで竹の大桶にどんどん入れた。そして法螺貝を合圖に、栓をぬいたので水は物凄い勢でゴウゴウと樋をつたつて流れて行つた。ところがどうしたとか、東山の水は大桶から勢よく出て行くが、最初から樋から水がこぼれ、今の神水町くわみずまちあたりまで流れてゆくと、どんどん水がこぼれて先へ少しも行かなくなつた。それがため地下は凹み見る見る中に下は大洪水となつた。さうする中に、西山の水が、ごうごうと音をたてて流れてきて、東山の水を次第次第に押へかへし、はては東山へどんどん流れ落ちて行くので山の麓は一面大海原のやうになつた。そして東山の頂も瀧のやうに流れ落ちる水の勢でだんだん凹んできた。

天より勝負いかにと御覽になつてゐられた大神様はこのありさまを見て、

「もう勝負はついた。早く水を止めよ、でなければ東山はなくなつてしまふぞ。」
といはれた。

東山の神様は頭をかきかき、

「これまで威張つてゐたのはわるかつた。たしかに西山が高いといふことがわかつ

たので、もう決してこれからはイヒダサン。」

といはれた。少し山が低かつた上に、水のために頭をびつしやがれたので、今でも山頂は凹んだやうになつてゐる。

神水町くわみづあたりに水の多いのもその時からで、その時の落水で土地が凹み、その處に神様の水が溜つてゐるので今でも二尺三尺と掘れば地下よりコンコンときれいな水が噴出すといふ。

木山川より江圖湖に流れる水もその時からださうで、東山のことを飯田山といふやうになつたのもその時からであるといふ。

第九十三話 三年寝太郎の話

昔、或るところに三年寝太郎といふ何時も寝てばかりゐる男がゐた。

或る日、隣の人がやつてきて、

「小父さん、小父さん、はよ起きて風の神様にまゐらんと、田がしつかりそせとるけん。」

と云つた。そこで寝太郎は起きて自分の田を見に行つた。なるほど風のために稻がすつかり倒れてゐる。これはごまつたことになつた、早く風の神様にまゐらうと、寝太郎は風穴のあるところに行つて詣つた。一心不亂にまゐつてゐると、突然ちりまき風が吹き起つて、寝太郎を風穴に吹きこんでしまつた。彼はずんずん下へ下へと沈んで、たうとう下の國についた。

寝太郎はあたりを見まはした。しかし誰もゐない。急にさびしくなつた。しよんぼりと立つてゐると、一人のばばさんが現はれて、

「あんたは上の國の人だろ。」

とたづねた。寝太郎は、

「はい、上ん國の者です。」

と答へた。

「どうしてこの下ん國にお出でなはつたか。」

「ちりまき風に吹きこまれたつです。」

「そらおこまりだろ、わたしが鍬をつくつてやるけん、いつちよ、いつちよ、土を掘つて上んなはれ。」

親切なばさんのために寢太郎は一足一足鍬で掘つては上つてゐた。

上の國のある家では、或る日、庭の土が動いて下からぶくぶくもりあがつてきたのでびつくりした。

「あいあい、大もぐらが出てきよるぞ。槍もつてこい、薙刀もつてけえ！」

それはそれはの騒ぎになつた。家の者はてんでに槍や薙刀をもつて、出てきたらおのれ一つきに殺してやらうと見がまへてゐた。

ところが土の下から聲が聞えてきた。

「もぐらじゃなかばい、もぐらじゃなかばい。」

そして出てきたのは、はたしてもぐらではなくて三年寢太郎であつた。

「ああやつと上ん國に上れた。」

と寢太郎はよろこんだ。しかしその家の者は土の中から現れた不思議な男をとるかこんで、何やかやと質問をあびせかけ、はては、何思つたか家の中から大きなバツチヨ傘をもつてきて、これを修繕してくれ、といつたりした。

寢太郎は仕方ないのでバツチヨ傘の修繕にとりかかつた。しかしそれは途方もなく大きなバツチヨ傘だつたので、手傳ひ人を大分要した。

その中にバツチヨ傘の修繕が出来たので、紐をつけて、寢太郎は自分でちよいとかぶつてみた。

ところがその時、またもちりまき風がにはかに起つて、傘をかぶつてゐた寢太郎を天の國にふきあげてしまつた。

寢太郎が天の國についてしよんぼり立つてゐると、一人のばさんがやつてきた。

「あんたは下ん國の者だろ。」

「はい、下ん國の者です。」

「どうしてここさんお出でなはつたつた。」

「ちりまき風に吹きあげられたつです。」

「そりや、そりや、ところで今年やひどいひでりつづきで、雷さんが手が足らんけん、光りもんに加勢してくれるもんをさがしとつたところだつたたい。あんたが来てくれてええあんばいだつた。一つたのむばな。」

そしてばばさんは寢太郎を自分の家につれてきた。

その中にぢいさんが歸つてきた。ばばさんは寢太郎を指して、

「こん人は下ん國から上つてこらしたつですばい。ええあんばいだけん光りもんに加勢してもらふこてしましたばい。」

と云つた。ぢいさんもよろこんで、

「ええかな、さう、笹に水をつけてこぎやんうちふるとよか。ほらピカピカするだら。さうさう、うん、うまいうまい。」

と寢太郎にその方法を教へた。

「あんたなかなか上手たい、そぎやんするだけでよかよか。南の方にだけは行きなはんな、南の方にや雲がなかけんつこくるばな。」

とばばさんも親切さうに口添へした。

寢太郎は一生懸命に笹の葉に水をつけてはうちふりうちふり光りもんの加勢をした。雲の上をあちらこちらと踏み歩いてさかんに働いた。

「まあ、あんただろ、何ばそぎやんふんたくるかな。きちがひのごつなつてやたらほくそに蒲團でんなんでんふんたくつて、ほう見なはり、こんさまはなんかな。」と耳もとでどなられて、寢太郎はびつくりして目をさました。寢太郎の細君があまりのことに目をさかだててゐたのである。

「なあんだ夢だつたか。俺あ今まで下の國から天の國まで行つてづつと働きどほしだつたぞ。そぎやんはりかくな（怒るな）、どぎやんきつかつたか。」と云つたさうである。

昔、或るところに、正直者の男がゐた。或る時、この正直者の男が町に買物に出て、日の暮れがた歸りをいそいでゐると、どうしたことか路に澤山の錢が落ちてゐた。男はそれを見ると、心をときめかして一たん拾はうとしたが、

「待て、待て、あらアどこの占師うらなひさんに見てもらつても、あんたはとても正直者だけんで天金の興へがある、といはれた。この錢は天から降つたものぢやなかけん、拾うぢやなるまい。」

さう思ひ直すと、そのまま家に歸つた。そこに隣の男がやつてきたので、正直者の男は、ありのままに道に錢が落ちてゐたことを話した。するとその慾深い隣の男は、

「こらア大したこつばい、どれ俺が行つて拾つてこよう。落ちとる錢を拾はんバカが

あるかい。」

と心中ほくそ笑んで、家に歸るとすぐ大きな袋を用意して、大急ぎでその場に出かけた。

ところが行つてみると、これはどうしたことか、澤山の錢が落ちてゐるところか、たつた一文の錢もなく、そしてあらうことか數へきれぬほどの百足が、うようよしてゐるのであつた。慾深い男は、これを見ると、怒るまいことか、

「糞ッ！ 俺ばうそだまかしやがつたばい、あんげどされが、俺がどうするか見とれ。」

とばかりに大いに怒り、竹切の先で、そこにうようよしてゐる百足をみんな袋の中に入れてしまつた。そしてそれをかついだがその袋の重いこと重いこと、やつこのことで汗びつしよりになつて歸つてきた。

慾深い男は、それから隣の正直者の男の家の方にゆき、ハシゴをかけてその屋根に上つた。そして寢床の上あたりと思ふところの屋根を破つて、そこから袋の口を

解いて百足をばらまいた。それでだまされた意趣晴らしをするつもりだったのである。ところが下に落ちた音は、

「チリリン、チリリン、クワラ、クワラ」

と意外にも澤山の銭の落ちた音であつた。

下でもう眠つてゐた正直者の男は、突然天から何か落ちてきた物音に眼をさました。見ると夜目にも光る黄金の山である。天金の興へとはこれだつたか、と男は大變よろこんださうである。

一方隣の慾深い男は、大急ぎで屋根から下ると、すぐ正直者の家の戸をあけてはいつた。そして黄金の山の中に、にこにこして、うづまつてゐるのを見て、びつくりして、自分のしたことを話し、

「自分のやうに慾深くては天金のはさらんばい。」と云つたさうである。百足を銭の精といふのは、こんなことがあるからである。

第九十五話

追刺から二本の刀をとりあげた彦一の話

彦一ちゃん——といへば、ははア、あの男かと皆さんは、にっこりしてあの八代の名物男を思ひ出して下さるだらう——について、また一つ二つおもしろい話を聞き出した。

彦一ちゃんも、さすがに師走ともなれば毎年のことながら溜息が出る。前の年は田舎の百姓男が町に米賣りにくるのを大村橋の上に待ちかまへて、善良な百姓の眼をくらましてウケのないサシを米俵に、つきこんでは兩の袂に一ぱいも米を落しこませたり、死人の眞似をして借金取をあきらめさしたりしたが、その年は、もうその手を使ふわけにはゆかぬ。さりとてこのままでは今年こそどうなるかしれたものではない。とつちいつ考へてゐたが、さすがは智慧者の彦一ちゃんである。何思ひついたか三十一日ひるから、家の裏に廻つて、瓦をグワラグワラと打碎き出した。

異様な物音に、あつたまげて出てきた細君は、これを見て、彦一ちゃんが氣でも狂うたのかと思つた。

「あんた、何ばすつとかな。」と心配さうに近づくと、

「だまつとれ、松馬場に、おひはぎが出るとば、ぬしも知つとるどが。なんさまそやつは侍で、刀は二本差しとるげなけん、そるば取り上げてやらうと思ちない。刀二本もあんならそるば質屋にもちこむとよか正月の出来るどが。」

と彦一ちゃんは昂然として細君をかへりみ、につと笑つた。けれども細君は相手がおそろしいおひはぎだから不安でならなかつた。

「そらア刀二本もあると、よか正月も出来うばつてん、相手の刀にさかさうちまられはせんかな。」

「細工はりゅうりゅう、だまつて仕上げば見さし。何のあるがそぎやん間抜けたこつばするかッ。」

彦一ちゃんは打碎いた瓦のかけらを木箱に入れ、それを油紙で包み、それから隣の隠居のところに行つて、

「御隠居さん、今日はお願ひに上りました。これに一筆、御用金と書いておくんさす。」と白紙をさし出した。

「そら易いこつたい。」

隠居は眼鏡の奥の眼を、しよぼしよぼさせて墨黒々と御用金と書いてやつた。

「ありがたうございました。」

彦一ちゃんはにっこり笑つて家に歸ると、その紙を油紙にはりつけ、今度は、麩屋に行つて、まんじゆ麩を買つて来て青くぬり、それを自分の額の横つちよにくつつけ、こぶをよそほひ、脚絆をはき、目のくれ方、松馬場にさしかかつた。すると果しておひはぎが松の木蔭から現はれた。

「待て、待てといふのがわからんか。」

たいへんな大声である。彦一ちゃんは、待つてゐましたと心の中で云ひつつ立ど

まつた。おひはぎは彦一ちゃんの行手に立ちふさがつて、
「何だそれは。」

「はい、薩摩境から細川様へ納める御用金ですたい。」

「ふん、さうか、見たところお前は五分つかれたごたるな。」

「はい、もう足も腰も立ちまつせんと。」

「そんなら俺が持つてやる。お前はあとからついてこよ。」

「いえ、そんなことは出来まつせん。」

「どうしてや、俺が心配か。」

「そんなら頼みます。その代り、ああたの大切なその二本の刀ば私にもたせて下は
り。」

「よしよし。」

二本の刀を彦一ちゃんに手渡したおひはぎは、御用金と書かれた箱を受取り、そ
れを、やつこらさと肩にかけると、すたすたと小走りに走り出した。彦一ちゃん

は、びつくりしたやうな聲でうしろから

「旦那さん、あんまり足の早か。」

といひつつ、實は計畫的な後すざりをはじめた。

「旦那さん、旦那さん——」

と大聲で叫びながら身はいつしか我が家の方に歸つて行つたといふ。

こんなに智慧の多い彦一ちゃんではあるが、字は一字も知らなかつた。或る年の
こと、彼は小さな雜穀商をいとなんでゐた。

或る朝、彦一ちゃんが店の前口を掃除してゐると、在ざい(田舎)から米二俵を持つ
た、さる仁じんが店頭店頭に現はれて、

「これに書いてある家はどこだらうかな。」

と紙片をさし出した。それには彦一ちゃんの姓名が書いてあつたが、字の讀めぬ彦
一ちゃんは、いくら見てもわからなかつた。しかし、字が讀めないとはいひたくな

い。米を持つてゐるところから見て米屋に用があるに相違はない、と思つた彦一ちやんは、四五軒先の大きな米屋を指して、

「あすこですばい。」と教へた。

「ありがたうござした。」

とその男は二三度彼に頭をさげて、その米屋に行つたが、その米屋の主人はその紙片を見て、

「こら、ここちやごつせんばい、もちつと手前だつたたい。」といひつつ、前に出てきて、

「ほら、あすこば掃きよらすとがこの人たい。」と教へた。

「ええこそ、そんなら、さつかりあの人に聞きましたつばい、ここて言ひなはりましたがな。」

と首をひねりひねり、後がへりした。そして彦一ちやんのところにくると、

「あんたばかりは、どんこんならん。こらあんたぢやなかかな、あすこん米屋の大將が教へてやらしたばい。」

と不平さうに怒つた顔でつけつけと云つた。ここで參つては彦一ちやんも話にならぬと思つたか、即座に、にっこり笑つて、

「すまんだつたな、あんたばちよつとぞうくつてみたつたい（からかつてみたつたさう。）」

と云つたといふ。

第九十六話 おまん屏風の話

八代に光徳寺といふ寺がある。ここは九州でも有名な寺であるさうで、かつて頼山陽がやつて来て、時の住持から一本參らされたといふ話もある。門徒衆も廣く、

山の中の田舎からも昔から御正忌には泊りがけて衆をなして参詣した。

或る年の御正忌のことであつた。田舎衆は例年の通り大勢炭を持つてくるもの、干筍をもつてくるもの、粟、ひえ、薪、芋、といふ風に、思ひ思ひの上げものを持つて、うちそろつて参詣した。着物は年に一度の、茶縞の、ごはごはした木綿の袖着物を着て、しやちこばつてやつて來、上げものをすますと、夕方のお齋膳とぎの出るまで御堂に休息してゐた。

この御堂の西側には風の入らぬやうに白幕を張りめぐらしてあつた。それをうち眺めた老人の一人が、

「ほほ、見しやつしやれ、これが話に聞いた光徳寺の、こんど出けた白壁ばい。」
といつた。外の一人がそれにつづいて、

「ほう、ほう、美しいもんじや。」

と云ひ、袖着物に手をふところ手してゐたのを出し、兩袖の端を中から、ぴんとひつばつて、やつこだこの恰好で、

「どれ、どきやん氣持のするか、ねんかかつてみようかない。」

と云つて、後向きにじりじり押しに退つて、よし、といふところで、ねんかかつた。すると、もとより壁ではなくて白幕のこととて何の支へもなく、すつてんころりと御堂より地に落ちた。

これから誰いふとなく、「光徳寺の壁にや、ねんかかんにやぞ、いのちうしなひするけんね。」

その夜一同は御堂に寝ることになつた。一月の初のこととて御堂は寒氣がきびしからうと思つた坊守さんは、そこにねる田舎衆のために屏風を張つてやらうと考へた。

下女のおまんが全部の寢床を敷き終つたのを見て、

「おまん、屏風を持つて來て張つて上げさつしやう。」
と云つた。おまんは素直に、

「はう。」と云つて座敷から六枚屏風をとり出してきてそれを御堂に張つた。

田舎衆は、がやがや云つてみんな寢床にはいつた。ところが夜中に一人が便所に起きて、歸りにうつかりして屏風を倒してしまつた。

倒した男は、びつくりして助けを求めたので、皆々目を覺した。ところが六枚屏風の立て方を誰一人知らぬのである。皆は屏風の折目のひだを寄せることに思ひ到らず、左右にピンと張つて立てようとするのである。そんなことをして屏風がいふことをさく筈がなくすぐ倒れかかるので、たうとう二人づつ交替で起きてゐて朝まで屏風を左右から立ててゐた。

御正忌も終り、田舎への歸りの途でみんなは、

「光徳寺のおまんにやうっちゃやうにや（うちあふな）、夜ンが夜のふてえ、ねせじやつた。」

とさかんにその屏風の噂をした。皆は屏風の名を知らなかつたので、おまんとおぼえこんでゐたのである。

第九十七話　クスカキ三助の話

昔、或る山の中にクスカキ三助といふ男が住んでゐた。クスカキといふ姓は、ひよつとすると楠垣、または楠柿と書くのかもしれないがよくわからぬので、カタカナで書いておく。彼は炭焼人であつた。山の上に一人くらして、日がな一日炭焼をつづけるのであつた。

ところで都に一人の若い女がゐた。どうしたわけかあまり縁談もないので、或る日、出雲の神様に聞きにいつた。

すると山の中にクスカキ三助といふ男がゐるから、それをたづねて行け、といふお告げであつた。

女ははるばる熊本の山の中まで幾百里の道をたづねて來た。そしてやつと山の中に一軒の小さな掘立小屋を見つけ出した。それは竹の柱に萱の屋根であつた。女は

そこに近づいて行つた。見るとみすぼらしい男が一人住んでゐた。

「一寸おたづねしますが、あなたはクスカキ三助さんと仰言る方ではありませんか。」

と女は云つた。男はげんさうに眼を向けて、

「はア、おれがクスカキ三助ですたい。」

と答へた。すると女は、

「やつとさがしあてました。私は都のものですが、出雲の神様のお告げによつてまゐりました。わたしをあなたの嫁にもらつて下さう。」と云つた。

三助はびつくりして、

「おれが口でん養ひきらであるとき、嫁ばもろちどうするかな。」と云つた。女は、

「私が食ぶるだけはもつてきとりますから、どうぞもらつて下さう。」と熱心にたのんだ。そこで三助は、

「あんたがそぎやんまじいふならもらつてやるだい。」

といつて、二人は夫婦になつた。

或る日、嫁は小判を出して、

「これで米を買うてきて下さう。」

といつた。三助は無雑作に小判を握つて家を出たが、途中、堤のあるところを通りかかつたら、ヒンコツといふ小鳥が群れてゐたので、手にした小判を石をなげるやうにして投げた。小判は堤の中に落ちて波紋を多がついて沈んでしまつた。

三助はそのまま家に歸つた。

嫁は三助が米も買はず、小判も持つてかへらなかつたので、どうしたのかと聞いた。三助は、堤にヒンコツ鳥がゐたから、あれを投げつけてやつた、といつた。嫁はびつくりして、

「あれは小判でしたよ。」

といつた。すると三助は、

「あぎやんとなら、おれが家ん裏ん簞の中にどしこでんある。」
といった。嫁が三助に案内されて行つてみると、なるほど大判小判がざくざくあつた。

そこで嫁はよろこんで、

「こんな金があるのにこんな山の中にもたせようがないから山を下りませう。」
といった。二人は相談して、山を下り炭の取引先に行つて家を買ひたいと話した。

いくらなら賣つてもよい、と店の主人が話し出した値で二人はその大きな家を買ひとつた。そして二人は、下女や下男をやとひ入れてたのしい生活をはじめた。

やがてお正月が来た。

下女下男どもは何といつて二人に挨拶したものかと考へた。二人がはじめて揃つてお正月を迎へるのだからといろいろ考へた。

それから揃つて二人の前に出て云つた。

「お正月がきて却つてお若うおなんなはりました。おめでたうございます。」

今も正月の挨拶にかういふのは、この時からだとつたへられてゐる。

菊池郡北村の米原長者の話もこれと同じで、クスカキ三助が薦編小三郎といふ名になつてをり、京の女がそれをたづねあてたところは水源村の四丁分となつてゐる。この小三郎がのちに米原に移り住んだので、米原長者といふやうになつたといふ。

第九十八話 我のつよい座頭の話

或るところに大變我のつよい座頭さんがゐた。或る時その座頭さんが一人で田舎道を歩いてゐた。ところでその田舎道は曲つてゐて曲り角を曲らずにすすめば、先はどぶ溝になつてゐた。座頭さんは田舎道を杖をつきつとつとつ歩いて曲り角まで来たが、そこが曲り角といふことに氣付かないと見えて曲らずにまっすぐにとどぶ溝の方に足をはこんだ。恰度そこに通りあはせた一人が、

「あつ、座頭さん、右さん曲らんかな。まつすぐ行くとどぶん中にはいるばな。」と聲をかけた。座頭さんはその聲を聞くと、

「ふふん。」

と笑つて、まつすぐに進んだ。座頭さんは人がからかつてゐるものと思つたらしいのである。ところがどぶ溝は本當だつた。座頭さんは次の瞬間にどぶんとばかりそのどぶ溝の中にころげこんでしまつた。

道を注意した人は、これを見るとおどろいてどぶのふちに立つて、

「ほら、みなはり、おれがいふごつあんたが曲らんだつたけんたい。」と云つた。座頭さんは頭からどぶ水をかぶりながら、それでも負けん氣で、

「何ばいふかな、わしやこんどぶの中にはいりに來たつばな。」と答へた。これには話しかけた人がめんくらつて、

「何てちな、このどぶん中にはいりきたてちな、バカバカしい。どぶん中にはいつて何ばするとかな。」

といつた。座頭さんは、にやにや笑つて、

「ぼらふりばとりきたつたい。」

と答へた。

「へえ、ぼらふりばとつて何するとかな。」

とけげんな顔でたづねると、

「ケンギョウにくはするとたい。」

と座頭さんはすました顔で答へたといふ。

ケンギョウとは座頭さんの頭の檢校と、金魚とをかけて答へた言葉であつた。

座頭さんの話のついでにもう一つ。――

我のつよい座頭さんが山道を一人歩いてゐた。ところでその座頭さんの我がつよくて、いつも辛辣な言葉ばかり放つてゐるのを常々好かぬ男が反對の方から通りかかつた。そしてその男は前方からこちらにとぼとぼとやつてくる座頭さんの姿をいち早く見つけた。

「いいところでくわしたぞ、あのにくたらしい土座頭つちざとうがけまつるるごつ（蹴躓づくやうに）道ばたに木ば投げておいてやれ。」

と思つて、大きな材木をその道に投げた。

座頭はそこまで近づいてきたが、ふと足をとめて、首をかたむけ、大きな聲で、「この邊に無常ごつのあつたかな。」

と云つた。男は藪から棒の座頭の間ひ方にめんくらつて、

「何でまた無常ごとがあつたかなんてきくのかい。」
ときいた。すると座頭は、

「この邊になげき（投木）のこえがしたからだよ。」
とすまして答へたといふ。

或る時、座頭さんが百姓家に呼ばれた。その日の御馳走は「だご汁」であつた。座頭さんは、だご汁を食つたのは生れてはじめてであつた。

「これはうまい、こんなうまいたべものはこれまで食つたことがない。」

と思つた。そして座頭さんは、その日のだご汁の残りのことが氣にかかつて、どこにしまはれるかと耳をすましてゐた。それは戸棚の中にしまはれたやうであつた。

真夜中、座頭さんは、まつ暗な中をはだかのまんま寢床から這ひ出して戸棚の方にしのびより、こつそりとだご汁をとり出した。ところがそれを入れるものが何もない。そこで座頭さんは自分のへこをはづして、それにだご汁を包み、それから自分の部屋の方に投げやつた。ところがそれは圍爐裏の上の自在鍵にひつかかつた。暗闇の中のこととしてそれとは知らぬ座頭は、自分の寢床の方に這ひもどり、あちこちと今しがた投げやつただご汁の包を探したが、わからないので仕方なく諦めて寢た。

翌朝、家の人々は、自在鍵にひつかかつた異様なものを發見してびつくりした。

何しろきたない布切からへんな汁がしたたり落ちてゐるのである。家の者は顔見合せて、これは一體何だらうと話しあつた。それをきいた座頭は、寢床の中から、

「つつんであるのは知らんがへこは自分のつ。」と云つたといふことである。

第九十九話

子供にとんでもない長い名をつけた話

或る村の或る一軒の家にはじめて子供が生まれたが、その子供は一ヶ月もたたぬうちに死んでしまつた。若い両親は、たいへんなげいて、村一番の物識りであるお寺の坊さんところに行つて、

「自分の子供はどうしてこんなに早く死んだのでせうか。乳も澤山あつたし、榮養も悪かつたとは思へないし、風邪をひいたやうでもなかつたのですが。」とたづねた。お坊さんは腕をこまねいてしばらく考へてゐたが、

「その子供さんの名は何でしたかな。」ときいた。

「ちよん。」

「なアるほど、いやわかりました、わかりました。一ヶ月もたたぬうちに死なれたのはですな、つまりその名前のせいですよ。名前があまり短いからですよ。名は生命をあらはすといひますからな、つまり名前は長い方がよいわけです。なるだけ長い名前をつけるとよいわけです。」

「さうでしたか、あの子は私達が短い名前をつけたので短命だつたといはれるのですね。」

「つまりさうですな。」

「やつとわかりました。いやどうもこらアあの子のいのちに對してすまぬことをしました。折角生れてきたものを、わたしたちが何もしらずに短い名をつけたばかりに、こんな目にあはせて、あの子にすんまつせん。」

親たちは泣きじやくりながら家に歸つた。

一年ばかり経つてまた子供が生れた。男の子である。両親は、こんどこそ長い名をつけてこの子のいのちをいつまでも長く保ちたいと思つた。七日七晩考へに考へ

た末、つけた名前はいかうであつた。

「イーイーイツサイイツサイコクノイージンノイラマンガイーサイーデーサラバ
ーサラマロマロコウイーサライツトウジンノイーキリモンメキリモンメインダラ
半ノ半次郎。」

兩親は苦心の末につけた名前だけに、甚だ得意であつた。今度の子供こそ、大いに長生してくれるだらう、とそれを信じて心たのしむ兩親であつた。

近所の人が、

「今度のあの子さんの名は何ですか。」

とさくと、得意になつて、

「イーイーイツサイイツサイコクノイージンノイラマンガイーサイーデーサラバ
ーサラマロマロコウイーサライツトウジンノイーキリモンメキリモンメインダラ
半ノ半次郎ですたい。」

と答へた。しかし近所の人々はそのおそろしくいひにくくて奇妙に長いおかしな名

前をなかなか覚えきらずに、まちがひまちがひしつゝ話した。中にはその兩親を、頭が少しへんになつてゐるのではないか、と案ずるものもあつた。

しかし何ごともなく、三年四年は経つた。子供は日ましに太り、年毎に成長し、可愛らしくなり、いたづらもよくし、兩親は眼の中に入れてもいたくないやうに可愛がつた。

或る年の夏のことであつた。もうその子供は五つぐらゐであつたらう。或る日、ばたばたと足音をたてて村の一人が子供の家にかけてつた。そして呼吸せききつて、

「おんなはりますか、おんなはりますか。」

とどなつた。兩親がたまがつて姿を見せると、

「ああなたところのイーイーイツサイイツサイコクノイージンノイラマン
ガイーサイーデーサラバーサラマロマロコウイーサライツトウジンノイーキリモ
ンメキリモンメインダラ半ノ半次郎さんが宮の裏の堤の中にはいりこんでおぼれて

死によんなはりますば。」

と告げた。子供の両親はびつくりして、

「何ですな、うちのイノイイイツサイイツサイコクノイージンノイラマンガイーサ
イノデーサラバーサラマロコウイーサライツトウジンノイーキリモンメキリ
モンメインダラ半の半次郎が宮の裏の堤の中にはいりこんでおぼれて死によります
どか、そら大へん。」

といつて教へにきた人と一緒に駆け出した。そして堤のところに行きついた時は、
あはれにも子供は今しがた呼吸絶えたところであつた。子供の名があまり長いので、
それをしらせにきた人、それをきいた両親が両方から長い子供の名を云つてゐる間
に、子供のいのちは絶えたといふ。

長い名については、別に熊本にのこつてゐるのに次のやうなものがある。

「妙法蓮華經フモンホンダイ二十五ニージンムージンニポーサツフクジューサーキ
ヤーヘンダンムーケーチョーキーガーヌシヤ甚五郎。」

第 百 話

タニシとイタチが競走した話

昔、或るところで田螺たにしと鼯鼠いたちとが、ひよつこり出あつた。タニシはこれから二山
も越えた先まで行く用事があるけれど、ほんの少しづつしか歩けないので、困つて
ゐたところであつた。タニシの歩み方でゆけば、そこまでは少くとも数十日はかか
る大旅行であつたからだ。何とかしてうまい乗物にのれないものかと思つてゐたタ
ニシは、ひよつこり出あつたイタチを見ると、急にずるい考へが浮んできた。タニ
シはにやにやして話しかけた。

「イタチさん、イタチさん！　ここであつたからには何かおもしろい競争をしてみ
ようではないかな。一つ向ふの山までかけくらをやつて見ようや。」

イタチは、それをきくとばかにしたやうにして云つた。

「かけくらなど、タニシどん、ぬしや氣でも狂ふたつかな。おるが走り方の早かこ

つア誰知らぬものもなか筈、それを知つてぬしがなほかけくらは申込むとは一體全體どうした見かな。」

「イタチさん、あんたがかけくらん早かといふことは、なるほど噂にやわたしも聞いたことアある。しかしわたしのこの目で見たことアまだ一度もなかもんな。わたしもかうしとるばつてん、かけくらんなら誰にも負けん氣はある。あんたが早いかわたしがおそいかものはためしたい、一つやつて見ゆばな。」

イタチはバカバカしくてならなかつたが、強いて競走をいどむ頑固者のタニシを見ると、この生意氣な小僧の鼻をあかしてやれといふ氣になつて、

「そぎやん競走したかなら、よかたい、やつて見うばな。タニシどん、あん山んとつぺんまぢだけんな。」

イタチとタニシはそこで一二三の掛聲で出發した。ずるいタニシは出發と同時にひらりとイタチの尻尾にとびついてゐた。

一つ向ふの山の頂きまで駆けつづけたイタチは、タニシどんはどのあたり來よら

すかな、と後を向いて見たが影も形も見えない。

「おーい、タニシどん。」

と大聲で呼ぶと、後の方で、

「イタチさんな今かな！」

といふ聲がした。イタチがふりかへつてみると、タニシは、はここに笑つて立つてゐた。イタチはタニシはおそろしく速い奴だと思つて、びつくりした。

「よし、今のはあるが負けた。もう一つ向ふの山までかけくらをしよう。」

とイタチが云つた。タニシはよろこんでそれに應じた。またしてもずるいタニシは出發の時ひらりとイタチの尻尾にとびついた。

次の山の頂上まで一生懸命に走つたイタチは、こんどこそ勝つてゐるだらうと思つて、後を向いてタニシを呼ぶと、後の方でまたも、

「イタチさんな今かな！」

とタニシが落ちついて立つてゐた。イタチは、びつくりしてタニシは速いなと思つ

た。

「よし、もう一度こんどは山の麓まで。」

とイタチは云つてまたかけくらしをした。山の麓でイタチはまたしてもタニシが先立つてゐるのを見たが、その時、イタチはたうとうタニシがずるくも自分の尻尾にくつついてきたのを知つて腹を立てた。そして今度はイタチがタニシにむかつて、自分をのせて走れ、といひ出した。タニシは、自分のやうな小さなからだに大きなイタチをのせるとそれだけでつぶれるからといつたがイタチはあくまで自分をのせて走れ、といつて聞かなかつた。タニシは困つて、空を何気なく見ると、ひどく風が吹いて雲が流れてゐた。タニシは、これを見ると一計を案じてイタチにむかひ、

「そぎやんいはるるなら仕方なかけん。イタチさん、さあ、背中にお乗んなはれ。上を向いて乗られんと手足が地について困りますばい。」

といつた。イタチは云はれるままに空をむいてタニシの背にのつた。イタチは雲がしきりに流れるのを見て「なるほどタニシは速い。」と思つた。しばらくして、タニ

シは、

「さあイタチさん、下りなさい。」

と云つた。イタチが下りてみると、もとのところである。

「何だ、ここはもとのところではないか。どうしたのか。」

とさくと、タニシは、平然として、

「もう一ぺんぐるりと廻つて來たつてすばい。」

と答へたといふ。

著者略歴

昭和九年日本大學法文學部史學科卒業
熊本にあり「日本談義」を主宰す。
主なる著書

「肥後先哲評傳」日本談義社刊

「肥後民話集」地平社刊

「誠忠神風連」第一藝文社刊

續肥後民話集

(出版會承認)
1300876號



昭和十九年一月十五日印刷
昭和十九年一月二十日發行

【三〇〇〇部】

定價 二圓二十錢
特別行爲 十二錢
稅相當額 合計二圓三十二錢

著者 荒木精之

發行者 田中秀雄
東京都神田區駿河臺二丁目十番

印刷者 小笠原幸吉
東京都神田區豐島町九番
東京三二八七番

發行所 有限地平社
東京都神田區駿河臺二丁目十番
振替東京 一七六、六三九番
電話神田 一三、一三七番
會員番號 一七、五二六番

配給元 日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二丁目九



98
106



寶價(稅込)2.32